

第6章 京都大学構内出土の旧石器

原 充

京都大学構内には、縄文時代から歴史時代にわたる各時代の遺跡が存在し、発掘調査が行われるたびに多くの遺構、遺物が検出されてきたが、旧石器時代に属するものは、ほとんどなかった。しかし本年度の医学部構内の調査において、旧石器時代のもと思われる石器が出土したので、以前に出土し簡単に紹介されていたもの[中村74a]とあわせ、ここに紹介したい。なお記述中の上下左右は、実測図中の上下左右に対応する。

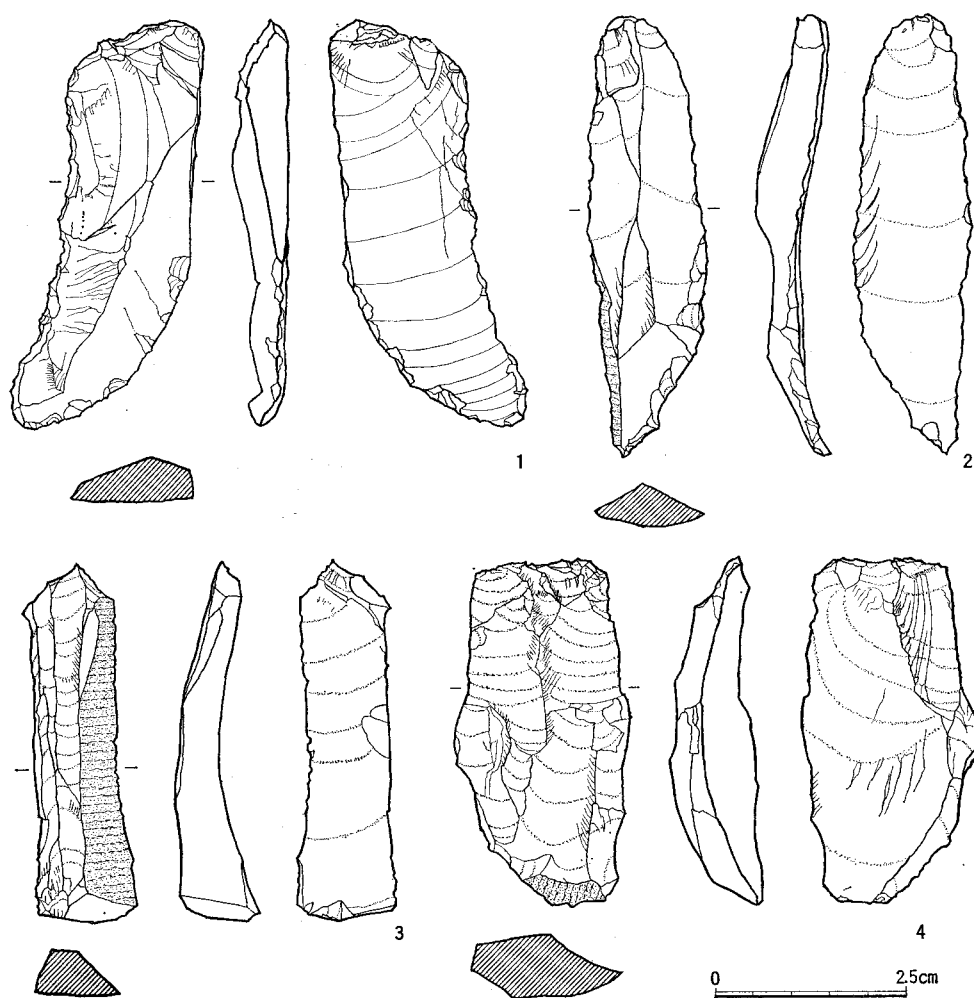
1は本年度出土したもので、出土地点はA P19区S D10淡褐色礫混土である。彎曲した縦長剥片を用いた削器と考えられ、石材は赤褐色のチャートを用いている。全長5.5cm、最大幅1.8cm、最大厚0.7cmを計る。背面は、3つの大きな剥離痕からなるが、左側の2つの打撃方向は主要剥離面の打撃方向とほぼ直交する。また上端には打面縁調整と思われる剥離痕が存在する。左側縁全体にわたって調整を施し刃部を作り出しているが、調整は縁辺部に限られている。腹面は全体が主要剥離面であり、リング・フィッシャーは認められるが、打瘤のふくらみはほとんどない。

2・3・4が既に紹介されているもので、石材はすべてサヌカイトである。

2は使用痕のある縦長剥片である。全長6.0cm、最大幅1.6cm、最大厚0.7cmを計り、全体にかなり風化が進んでいる。一見したところナイフ形石器のようであるが、両側縁の剥離痕は、ナイフ形石器特有のブランディングと認めるには微弱かつ不規則であって、使用痕と考えられる。背面の剥離は主要剥離面と同方向の打撃によってなされている。上端には、小さな打面がある。また、下端左側には自然面を残している。

3は縦長剥片で、全長4.9cm、最大幅1.4cm、最大厚1.0cmを計る。下端に打面を持ち、そこからの打撃による剥離痕が背面中央と左側にあることから、両設打面を持つ石核から剥離されたと考えられるが、背面から腹面に向けての打撃によって剥片が切断されており、上設打面は失われている。また、上設打面からの剥離は、下設打面からの剥離に先行する。背面左下の剥離は、階段状剥離であり、右側には大きな自然面が残っている。

4も縦長剥片であり、全長4.7cm、最大幅2.3cm、最大厚1.1cmを計る。この剥片は2・3に比べて稜が鋭く、各剥離面にはリングがよく残っている。背面下端に自然面が残る、そこを打面とした剥離痕が腹面右下にある。背面の剥離痕すべてが、上設打面への打



第37図 京都大学構内出土の旧石器

撃によるものである。腹面右上の剥離痕は主要剥離面を切っているので、本剥片は石核として使用されたと考えられる。

これらの縦長剥片はみな他の時代の遺物とまじって出土したものである上、数もごく少ないので、詳細な議論はできない。瀬戸内海沿岸における縦長剥片の編年的位置については、ナイフ形石器に先行するという鎌木義昌の説〔鎌木・高橋65〕があるが、確定的なものではなく、疑問が提出されている〔柳田77〕。そして、近年急速に調査研究が進んだ二上山北麓地域においては、縦長剥片と瀬戸内技法が共存することが確認されている〔佐藤79〕。